

りびんぐらいぶず 平成29(2017)年8月第1号

「摂取不捨」の利益

ご讃題

十方微塵世界の 念仏の衆生をみそなわし
摂取して捨てざれば 阿弥陀となづけたてまつる

（『弥陀経讃』「第一首」注釈版聖典 P571）

はじめに

平成二十九年七月九日に営まれた滋賀組十六日講では兵庫教区 K 組 T 寺のご住職 T 布教使という当年三十二歳の大変お若い布教使様から有難いお話を分かり易く承ることができて大変有難い思いをした。

ご讃題は、弥陀経讃第一首によられ、

「南無阿弥陀仏と称えれば聞こえて下さる南無阿弥陀仏が阿弥陀如来そのお方に他ありません」とおっしゃって、「摂取」のご左訓の

「ものの逃ぐるを追はえとるなり」と

「ひとたびとりて永く捨てぬなり」の二点を押さえることが大事である。とご案内頂いたからである。

蓮如上人は、「お聴聞はかどを聞け」と仰せ下さった(Ref『聞書』注釈版聖典 P1249)。裏返せば、ご法話は中核となる「論理的根拠」を押さえてご案内せよ」ということを意味する。

思えば、ご本山表の教学では「称えれば聞こえて下さる南無阿弥陀仏が阿弥陀様如来そのお方である」という表現の仕方(付線部)を許して来なかった。是には少なくとも二点を挙げうる。

称えることを最初に据えると自力の機執に陥る虞れがあるからこれを許さないというのがご常教のお立場だったからである。

また、文献学的には、称名学派と聞名学派とは流れを異にするため、両者は無関係ではないにしてもこれを俄かに融合することには抵抗があったからである。是を打開するにはこの先、学問的確認が成熟していくことが必要である。

そのような過去のしがらみに執われずに若手布教使は開口一番「南無阿弥陀仏と称えれば聞こえて下さる南無阿弥陀仏が阿弥陀如来そのお方に他ありません」とご案内下さった。お取次ぎの現場では実践展開の方法論が変わりつつあると窺われご同慶の至りである。

摂取不捨のご利益

「念仏の衆生をみそなわし」という御文に接する度に「念仏者にお育て下さって」と読むのだと瓜生津隆真先生から承ったことを思い出す。

ところで「摂取して捨てざれば」の御文は大經の第十八願文のお言葉そのものではない。第十八願文の「若し（お浄土）に生まれなければ仏にならない」とお誓い下さった御文を今生のご利益に置き換えると「摂取不捨の利益」になるとは〇和上の常のお言葉であった。

（覚書）「摂取不捨」は、如来様のご本願でお救いに与る機の真実を取り上げた『観経』第九眞身觀に基づき、更には『観経疏』の「二河白道」に由来する。

玄義分では「六字釈」が起こされ、これをもとに親鸞聖人はるる字義を重ねて行巻に独自に「六字釈」をご展開になり、「南無」とは「帰命、本願招喚の勅命なりと仰せ下さった。浄土真宗は「本願力回向」のみ教えであるという、その根拠は、実はこの帰命釈に基づくのである。「二河白道」には「汝一心正念にして直ちに來たれ我能く汝を護らん」と仰せ下さっている。

この「護」の御文が「摂取不捨」に当たるというのが親鸞聖人のお示しである。「護」の言は、阿弥陀仏果上の正意を顕わすなり、また摂取不捨を形（あらわ）すの貌（かおばせ）なり、すなはちこれ現生護念なり」というのがその御文である（『愚禿鈔』注釈版聖典 p539）。

東井義雄先生のお言葉から

東井先生は、小学校の教育者として著名である。豊岡市のお寺のご住職をなさりながら小学校に奉職していらしゃった。先生は「一等賞よりも尊いビリがある」と仰せ下さった。

毎朝学校まで自転車で通う道中、お地蔵様に両手を合わせお参りしてから出勤なさるのが日課だった。

ところがある日のこと、出発が遅れ遅刻してはならじとの一心で大急ぎで自転車をこいでお地蔵様の前を通り過ぎようとなさった。

そのとき先生の視野の隅で「私に向かって合掌して下さるお地蔵様のお姿」が目飛び込んできた。このエピソードによって先生の言葉が生まれた。それが

「おがまないものも おがまれている。

おがまないときも おがまれている」

阿弥陀様の方から私を拝み続けて下さる。それが阿弥陀様のお心である。

「弥陀と私は松葉の中よ」と言われる。阿弥陀様の方から私を抱いて抱えて下さっている。

そのはたらきを分かり易く頂戴するのに、私たちはしばしば親様と表現してきた。親自身はあえて子供に対する愛情の姿を告げはしないけれども、その働きはすでにして子の中に入り満ちている。阿弥陀様のお慈悲も丁度その様に阿弥陀様の方からあなたの中に入り満ちている。

阿弥陀様に出会う前はどうか

私が二河白道に「百千の里」とある長い輪廻転生の存在であった間、阿弥陀様はどうしていらしゃったのか。どうしてもっと早くお慈悲にお会いできなかったのか。阿弥陀様が力不足だったからか。決してそうではない。長い転生の存在だった間私はずっと阿弥陀様の働きかけをはねつけていたのではなかったか。

法然聖人のお歌に

「月影の至らぬ里はなけれども 眺むる人の心にぞ住む」がある。

月の光はだれかれの隔てなく届いているけれども、ご縁に触れることのできるのはその光をはねつけようとしない人の心の中にだけ至り届いていて下さっている」というお心である。

ホリエモン(堀江貴文)という男が居た。東大を卒業し会社を興し若くして巨万の富を得た。調子に乗り球団や放送局買収にまで手を出し証券取引法違反があったとして有罪判決になり刑務所に収監されていたが、刑期を終えて出所した。そのとき、「ホリエモンというのはどういう男だったのか」という放送特集番組が組まれた。彼は「九州の田舎に生まれ、小さいときは両親は私をかまってくれず祖父母に育てられ随分さびしい思いをした」と吐露した。

そのときアナウンサーが唯今あなたのお母さんからのお手紙をお預かりしています。ここで読み上げていいですかと言って読み上げたお母さんからの手紙とは、

「出所の瞬間『おめでとう』と送ったメールに『ありがとう』と返信してくれて安心しました。そして四十一年間を思い出していました。小学生の頃「お母さんは百点取ってもほめてくれない」と言っていたけれど、一緒に喜んでいたし褒めていたよ。大学に合格した時、「まぐれです」と私が誰かに話をしているのを聞いて「まぐれじゃない」と怒ったけれど、あなたが頑張っていたことはちゃんと知っていたし、本当は自慢したかったの。あなたの事業のことを額に汗していないと批判されても、寝ないで仕事していたことも知っていたし、事件の時も自分の信念を通してくれることを願い、その通りに貫いてくれたことを誇りに思っているよ。最後に、これからは今まで支えて頂いた皆様、関わって下さる方達に感謝することを忘れないで下さい。母より」

ホリエモンの両眼から涙が溢れだし「云ってくれなきゃ分らないじゃないか」と擲揄(やゆ)したけれど、親の愛情の存在に気づき得たこの瞬間のみならず、それ以前からずっと親の愛情は働き続けていたのだった。合掌。

宗祖七百五十回大遠忌実行委員会八月六日(日)十九時

八月二十日(日)午前十時、歡喜会(盂蘭盆会) & 百回忌の法要 (お客僧) 平野 正信師
著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地

077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥